令和元年度　Vol.10

防災対策 情報便

発行日	令和２年１月31日
発行元	災　害　対　策　課
所属長	課 長　馬淵　　勉
電　話	06－6489－6165

１ 津波等一時避難場所を追加指定します。

令和２年２月１日(土曜日)から、次の施設を津波等一時避難場所に追加指定します。

施設名	所在地	収容人数
尼崎市中小企業センター	昭和通 2-6-68	700 人

今回の施設の追加指定で、合計 359 施設（361,800 人）となります。

２ 「１．17は忘れない」地域防災訓練を実施しました。

令和２年１月 17 日（金曜日）午後１時 30 分から、メイン会場である園田地区の園田中学校をはじめ、各地区の地区会場（中央地区は成良中学校、小田地区は小田中学校、大庄地区は大庄中学校、立花地区は立花中学校、武庫地区は武庫中学校）において、「１．１７は忘れない」地域防災訓練を実施しました。

この訓練は、阪神・淡路大震災の経験と教訓を次世代へと継承し、次の大災害への備えや対策の充実を図るため、地域防災力（地域で災害に対処するための能力）の向上を目的としたものです。

今回は、上町断層帯地震の発生を想定し、大地震発生直後の行動を確認する訓練や、地域住民を中心とした避難所の運営に関する訓練等を行いました。

自主防災会や、近隣の福祉事業所等から多くの方にご参加いただき、会場となった学校の児童生徒と共に行う有意義な訓練となりました。

メイン会場の園田中学校で実施した主な訓練内容は、次のとおりです。

⑴　シェイクアウト

防災行政無線による緊急地震速報の伝達を契機に、参加者全員が、それぞれの場所において、自身の身を守り安全を確保する行動をとる。

⑵　避難・安否確認

安全が確保された後、負傷者の有無等を確認し、避難行動を開始する。

⑶　避難所開設

学校関係者は、学校対策本部を立ち上げ、避難所の開設準備にあたる。

⑷　避難所運営

地域住民は、避難所運営組織を立ち上げ、避難所で起こる様々な事象に対し、その対応策を検討する。

⑸　救助救出・応急救護

消防署職員の指導により、倒壊家屋の下敷きとなった負傷者の救助方法や、応急救護について学ぶ。

⑹　ＪＭＡＴとの合同活動

ＪＭＡＴ（日本医師会災害医療チーム）と、市保健師等が連携し、避難所に収容されている負傷者や要配慮者の援護活動を展開する。

⑺　阪神・淡路大震災のふり返り

阪神・淡路大震災の記録映像や、震災当時の新聞、展示パネル等を鑑賞し、阪神・淡路大震災をふり返る。

シェイクアウト訓練

避難安否確認訓練

避難所開設訓練

避難所運営訓練

避難所運営訓練

ＪＭＡＴとの合同活動

救助救出訓練

応急救護訓練

阪神・淡路大震災の振り返り

３　令和2年のメッセージ（危機管理安全局長　辻本ゆかり）

今年は、阪神・淡路大震災から 25 年という節目の年です。
あの震災を体験した者は、当時の経験や教訓を忘れることなく次世代に語り継ぐ責任があります。
今後、30 年間で 70%から 80%の確率で発生するとされている「南海トラフ巨大地震」は、内閣府の想定によると、東日本大震災の 10 倍以上の被害とされています。
しかし、備えあれば憂いなしと言うとおり、災害対応は平時の心構えが大切です。
普段から防災を意識し、地域の防災力を一層高めることで、来るべき災害に備えましょう。

４　今年度も気仙沼市へ職員を派遣しています。

令和 2 年 1 月 31 日現在の派遣状況
建設部都市計画課土地区画整理室：1 名（土木職）
ガス水道部施設整備課：1 名（土木職）
派遣期間･･･平成 31 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日

５「ぼうさいアイアイ」に災害対策課の職員が出演しました。

「ぼうさいアイアイ」はＦＭあまがさきが毎週木曜日に、若者とフレッシュな防災トークを行い、尼崎市の地域防災力アップにつなげていく放送番組です。
1 月 16 日に放送された「ぼうさいアイアイ」には災害対策課の職員が出演し、「阪神・淡路大震災の被害状況を振り返り、過去の災害に思いを馳せる」をトークテーマとして、尼崎市の被害の状況を振り返るとともに、さまざまなエピソードや体験を交えながら、市民のみなさまにも今一度、ご自身の防災意識・備えを見直すきっかけにしていただきたいことなどをお話させていただきました。

放送の詳細は次のとおりです。
高橋）さて、きょうは、尼崎市役所の災害対策課から安田結吏（やすだ・ゆいり）さんが来てくれています。さて、今日はどんなテーマでしょうか。
安田）はい、明日、1月17日は、阪神・淡路大震災が起こった日です。あれから、25年となります。今回は、尼崎市での当時の被害の状況を振り返っていくとともに、過去の災害に思いを馳せる機会にしていきたいと思います。
高橋）はい、今年は、阪神・淡路大震災から25年になるんですね。平成7年に起きた震災ですが、あれから四半世紀のときが流れたことになります。今は年号も令和にあらたまりました。最近、本当によく言われているけれど、実際に震災を体験した世代も少なくなっているのでしょうね。
安田）そうですね。かくいう私も、「震災を知らない世代」です。平成8年生まれですので、当時は、まだ生まれていませんでした。特に被害が大きかった神戸市でも、当時のことを知っている市民や市の職員の割合が少なくなってきているとニュースなどでよく耳にします。でも、「震災を知らない世代」ではあっても、知る術がまったくないわけではなくて、当時の経験を被災したかたから学び取ることはできると思います。ですので、今日は、尼崎市でどんな被害があったのかということと、私がこれまでに知りえた震災のエピソードを、皆さまと共有したいと思います。
高橋）わかりました。ではまず、尼崎市での被害を振り返りましょう。安田さん、25年前の被害の概要から教えていただけますでしょうか。
安田）はい、25年前の1月17日、尼崎市での地震の揺れの強さは「震度6」だったといわれています。といいますのも、当時、尼崎市内には気象庁などが設置する公的な震度計が無かったので、公式の記録は残されていないのです。あくまでも「推定震度」ということになります。この地震により、尼崎市で亡くなった方は49名、負傷者は約7千名にものぼっています。また、当時は、市内で8件の火災が発生し、なかでも、立花町で起こった住宅火災では住宅が全焼して11名が亡くなるなど大きな被害が出てしまいました。
高橋）あらためて尼崎でも大きな被害があったんだなあと感じます。たしか、家屋の被害も大きかったんですよね。
安田）はい、家屋に被害を受けた世帯の数は、およそ12万にものぼったという記録が残っています。なかでも、被害集中地区となったのが、築地地区、戸ノ内地区、東園田地区で、築地と戸ノ内では液状化現象が起こり、家屋が不等沈下して、傾斜してしまったそうです。東園田では家屋の老朽化が進んでいたことによって760戸のうち434戸が全・半壊したとのことでした。

高橋）市内の各地域で液状化も起きていたんですね。築地（つきじ）戸ノ内（とのうち）など、かなり詳しい地名が出てきましたが、こうした記録は、今も何かで調べたりすることができるのでしょうか？
安田）はい、「阪神・淡路大震災尼崎市の記録」という、被害や対応についてまとめた本があります。その中に、市民から寄せられた体験がコラムとして載っていたり、当時の対応の反省点が教訓として残されたりしていて、わたしたちも日々の業務でも活用しています。
高橋）なるほど、「阪神・淡路大震災尼崎市の記録」ですね。市民の方の体験、きっとそのなかに、たくさん学び取るべきことが含まれているのだろうなと思います。ところで、たしか安田さんご自身も、尼崎市の出身ですよね。震災後の世代ということでしたが、小さいときから震災の話を聞く機会は多かったんじゃないでしょうか？
安田）はい、私は、尼崎市内の小学校に通っていましたので、1月17日には毎年訓練をして、担任の先生の被災体験を聞いていました。いつも寝ているところにテレビが倒れてきたけれど、その日はたまたま別の場所に布団を敷いていたのでけががなかった、など、今でもそういうエピソードはおぼえています。でも一番身近なのはやはり、私の母の体験ですね。
高橋）すこし聞かせていただいても、よろしいでしょうか？
安田)はい、当時、私の母は、尼崎市のとなり、西宮市に住んでいたそうです。地震があったとき母は寝ていて、ドーンという突き上げられるような揺れがあった直後に、しばらく大きな揺れが続き、家ごと揺さぶられているような感覚だったと言っていました。生後8か月の私の姉がいたので、覆いかぶさって揺れが収まるのを待ったそうです。それから外に出ようとすると、食器などが割れて床がガラスだらけだったので、布団を敷いてその上を歩いたそうです。外に出てからは、ご近所の方の家のドアが開かなくなっていたのを、お隣さんと協力して開けた、と聞きました。
高橋）家ごと揺さぶられるなんて、本当に怖い体験だとおもいます。そしてご近所さんと協力してドアを開けてあげたっていうところに、「共助」、助け合いの大切さを感じました。しかしなによりも印象的なのは、安田さんのお姉さんが当時、生後8か月だったということ。母親として、我が子を守るために必死だったんじゃないかなあって思います。避難所にも行かれたんですよね？
安田）はい、ご近所さんの救出作業が終わるとあたりも明るくなったので、母は近くの小学校に行ったそうですが、人が多くいて物資もなかったので、校庭で姉のおむつを替えて、すぐに自宅に戻ったそうです。その時、水やガスは大丈夫だったので、姉に何か食べさせようと、ミルクを作ることにしたんですが、お湯をわかして粉ミルクを溶かしても、冷やすための水が足りなくて、熱いままで、ちょっとずつ飲ませたと聞きました。その後は、尼崎市内に住む祖母の家のほうが被害は少なかったので、しばらくはそこで過ごしたそうです。断水して、水をもらいに行くことが日課のようになったこと、少しでも水を使わないようにと、お皿にラップを敷いてご飯を食べたことなどを教えてくれました。そんな暮らしが、2カ月ほど続いたそうです。
高橋）小さなお子さんがいるなかでの、その暮らし、本当に大変だったと思います。
ところで、安田さんは、尼崎市の災害対策課の職員さんとなって、何か市民のかたから震災のエピソードを聴く機会もあるのでしょうか？
安田）そうですね、被災体験ではないのですが、印象に残っているのは、ある市民の方からのお電話です。お問い合わせ内容は「阪神・淡路大震災の犠牲者を追悼する慰霊碑は市内にありますか」というものでした。私は、はずかしながら慰霊碑がどこにあるのか、そもそもあるのかないのかもわからなかったので、お調べしてお返事しました。実は、市役所のとなり、橘公園内に、亡くなった49名の方を追悼する慰霊碑があることがわかりました。お電話の中でその方がご遺族の方ということを知り、慰霊碑の場所をお伝えすると、「ああ、あるんですね、そうですか」と安堵された様子だったのが印象的でした。震災から月日は経っていますが、実際に震災を経験された方にとっては、ずっと思いや経験は残っているのだなあと思います。
高橋）そうですね。今日は安田さんからいろんなエピソードをお聞きしましたが、紙に書かれた記録やデータだけではわからないことがたくさんあると思います。この機会にいろいろな人と震災の話をして、思いをはせてみるとよいなと思いました。
安田）はい、最初にもお話ししましたが、25年、四半世紀が経って、遠い昔のことにも感じられる人が多いかもしれません。でも、私たちは、まだまだ経験者からじかに当時のエピソードを聴くチャンスが持てるはずです。「震災を知らない世代」だからと距離をおくのではなく、「知らない世代」だからこそ学び、その経験を次の世代につないでいきたいと思います。そして、今一度、ご自身の防災意識・備えを見直すきっかけにもしていただければと思います。さて、さいごにひとつ、尼崎市災害対策課からご案内をさせてください。災害時にスムーズに情報がとれるよう、「尼崎市防災ネット」への登録をお願いしています。メールアドレスをご登録いただくと、災害時には市からの避難情報などがメールで届くようになります。こちら、スマホアプリ版もございますので、アプリストアで「ひょうご防災」と検索いただくと、ダウンロードできます。また、昨年10月にお配りした「尼崎市防災ブック」をご活用いただき、あらかじめ避難の合図について決めておくことや備蓄品をそろえるなど、この機会にぜひ取り組んでみてください。食料品は特に、賞味期限などを点検の上、入れ替えや補充などしていただくと安心です。
高橋）ありがとうございます。阪神・淡路大震災から25年ということで、市民の皆さまも、あらためて、備えを進めていただければと思います。

以　上